に移る。この附近で大集団となつたガンは、更に日本海に近い石狩原野の石狩郡当別町を中心とした地帯に集つて、4月中旬から下旬の間に日本海上に去るのであるが、年によつて、5月10日過ぎまで残るものも少くない。この大集団はおそらく1万羽を越えるものと思われるが、近年殊に増えて来たようである。鵲川町地方に於ける秋の渡りは春にくらべて著しく少く、9月上旬から中旬にいたる間に現われるが、春とは逆にマガンの群が先に渡つて来てその数はヒシクイの方が多いのが普通である。カリガネの観察は北海道のようなガンの集団通過地で行うのが有利であろうが、いろいろの点から考えると、その中でもこの鵲川町の如き上陸地点が最も適当な個所ではないかと思われる。

終りに上記の小稿2編を草するにあたり、資料を供された信田修治郎氏並に早川琦太氏に謝意を表する。なお黒田長禮氏著鳥類原色大図説、内田清之助氏著日本鳥類図説、清棲幸保氏著日本鳥類大図鑑を参考文献とした。

クマゲラの蕃殖について

On the breeding habits of the Great Black Woodpecker

永 田 洋 平

Yohei Nagata

は し が き

クマゲラの分布は本州では秋田県八幡平と北海道全土にわたるが、その蕃殖習性は確認されていない。従つてこれを明かにすることはクマゲラが年々その個体数を減じ、絶滅の憂を濃くしている現在にあつては急を要することと思われる。筆者は1950年夏にクマゲラの巣を発見しその蕃殖の事実を確認する事を得、その概略は既に「野鳥」第17巻第6号に記述したが、更にあらためてその詳細を報告することとした。本稿を草するにあたりいろいろと助言を与えられた北大教授の犬飼哲夫博士、北海道庁林政課の斎藤春雄技師、農林省林業試験場浅川分室の宇田川竜男技官に対し感謝する。

観 察 記 録

第1回 目 の 發 見

場所 北海道川上郡弟子屈町字南弟子屈 18号旧軍馬補充部牧野（標高148m）

発見月日 1950年5月18日

蕃殖地の概況 附近一帯はなだらかな起伏があり、釧路川支流の幅約1mのアキタ川が東から西に流れている。この土地にはミズナラ・カシワナラ・ハンノキ・シュウリザクラ・エゾイタヤ・ヤチダモ・アカダモ・ソウシカンバの広葉樹の若木が繁り、ミズナラ・シイナラの枯損木が処々に立つている。そして下草にはエゾミヤコザサ・ヤマドリゼンマイが密生し、特にエゾミヤコザサが1m以上ものび倒木が多く、歩行困難な個所である。そして時にヒゲマの出没をみるような危険な場所であり、又キツネ・エゾリス・エゾライチョウがかなり蕃殖しており、アオバトの巢もこの附近に認めている。

営巢の情況 高さ3m、径1mのシイナラの枯損木の頂点に近く北向に径約12cmの巢孔があり、奥行は約30cmあつた。内部は測定し得なかつたが、産卵後まだ日の浅いものであるように思えた。雄はめつたに姿をみせなかつたが、雌は時折巢から飛出しては又飛来り巢に入るのを見た。しかしこの巢は翌日附近から出た野火のため跡かたもなく焼払われてしまつた。

第2回 目 の 發 見

場所 弟子屈町字モエリベツ町有牧場内

発見月日 1950年6月19日

蕃殖地の概況 弟子屈市街から南西に約8kmのモエリベツ部落附近の町有牧場内で、沢や高合が多く起伏の多い所である。到る所に巨大なアカダモ・ナラの枯損木が立つており、その間にカシワナラ・イヌエンジュ・ノリウツギの若木が疎に生え、下草にはエゾミヤコグサが密生していて比較的明るく歩行も容易な所である。

営巢の状況 巢は深さ約15m位の沢の崖の突端のアカダモ（径1.5m高さ約10m）の枯損木に第1回目の巢と同じく北に面して直径約12cmの巢孔が開いており、奥行27cm、深さ約70cmの縦孔の底部は臼状となり、そこ

には巣立間際の雛が4羽いるのを認めた。この4羽のうち1羽のみが雄で他は雌であつた。巣材は全く使つておらず、底部からは雛の糞とわづかな木屑が認められただけであつた。

最も発育のよい雛の1羽(雌)は翼210mm、嘴50mm、尾95mmあり、最も小さかつた雌の1羽は翼180mm、嘴43mm、尾50mmで、おそくとも2日後には巣立出来るまでに発育していた。巣の底部に約10cm程堆積して

クマゲラが食べ残したクワガタムシの頭部

いた雛の糞を調べてみたが、その大部分はミヤマクワガタとカミキリムシの腹部や胸部の破片であつた。親鳥は1回に2匹から5・6匹を捕えて来てそれを巣の附近の倒木や木の切株にのせて殺し、頭部を切断してやわらかい部分のみを雛に与えた。筆者はこれらの昆虫の頭部を巣を中心として半径50m以内で100個をみつけた。給餌時の状況をみると、雛は絶えず巢中でググ、ググ、ググ、グワッ、グワッ、グワッ、グワッと鳴いている。然しひとたび親が近ずくとそれらの雛は一斉に巢口に這い上り上半身を乗出してすばらしくかん高い声で叫びたてる。そして時には全く巢口から押し出されてしまうこともある。巢中の雛の姿勢は常に巢壁にとりついていて、巣立間際には先ず

底部に下りている事はない。キツツキ科の他の種の鳥は人が巣に近ずくと、けたたましく鳴いて巣の所在を知るに容易だが、クマゲラはむしろ巣から遠く去り全く姿を見せなくなる時がある。それ故その巣の発見は困難であると思う。

ここから最も近い農家まで約 500m あるがこの附近に牛馬の給水池があり、時に人の往来があり万一発見でもされたら捕獲されるおそれがあったので、発見の翌朝雛を保護しその翌日再び巣の附近に放した。雛は発育のよいのから順に放したが、いずれも 300m を飛翔するほど元気であり、運動も活潑であつた。放鳥後約 15 分位してから親鳥の 1 羽が姿を見せたが、給餌し始めたのは約 1 時間位後からのようであつた。翌日ここを通つたが時折幼鳥の鳴く声を遠く聞くだけでその姿は見られなかつた。

む す び

最近このあたり一帯の枯損木は伐りつくされてしまい、クマゲラも移動してしまつたが、年々この鳥が減少しつつある事実を思うと早急に保護対策を立てねばならない事を痛感する。殊に終戦後は凸凹はげしく農耕に不適当な原野にも開拓帰農者を盛んに送り込んでいるが、このような土地に入植させても結果は飲料水にも不便であり、収獲も十分でなく、薪炭材として木を伐りつくした後は四散するものが多い現状である。このようにしてクマゲラやアオバトの有力な蕃殖地が荒されて行くことは痛恨にたえないことで、関係者の反省をうながしたい。

Résumé

The breeding of *Dryocopus m. martius* (L.) in Hokkaido

Yohei Nagata

Dryocopus m. martius occurs all over Hokkaido, but little has been known of its nest. Nest was found at Moeribetsu near Teshikaga town, May 18, 1950. Young had already hatched. The nest was 10 meters from the ground in a dead tree, *Ulmus Davidiana* planch. It was in a hollow 70 cm deep, the nest entrance was 12 cm in diameter and the inside diameter of the nest chamber was 27 cm. They were four, one male, and three females. Upon fledging the female measurements were as follow: wing 180 mm to 210 mm, bill 43 to 50, tail 50 to 95.